

## 原子力発電のリスクとコストを考える —基盤教育科目「3.11と学問の不確かさ」公開授業の報告—

国際学部 清水 奈名子

### 原発のリスクとコストを考える

福島原発事故に関する研究フォーラムが主催する第10回フォーラムは、原子力発電のリスクとコストを考えることを目的に、2023年7月26日にハイブリッド形式で行われた。基盤教育科目「3.11と学問の不確かさ」の公開授業として企画し、学生99名、一般参加者26名が参加した。

フォーラムを企画した背景には、日本政府が気候変動対策と脱炭素を理由として、次世代型原発の開発と建て替えの推進、既存原発の60年超の運転を認める方針を掲げ、2023年5月に国会で関連法を成立させたことがある。この方針を議論してきた経済産業省の有識者会合「原子力小委員会」の委員である松久保さんは、NPO法人原子力資料情報室の事務局長として、原子力発電に伴うリスクとコストについて研究を続け、その成果を市民に提供してきた。

しかし、学生たちが日常的に触れるメディアでの報道では、原子力発電のリスクとコストについての情報は少ない。フォーラムの前に実施してきた授業のなかでも、「原発を再稼働すれば高騰している電気代が下がる」といった情報を、批判的に検証することなくそのまま受け入れている学生のコメントが多くみられた。そこで松久保さんを講師としてお迎えし、原子力発電のリスクとコストについて考える機会を設けることにした。

### 松久保さんによる講演

講師の松久保さんには、NPO法人に所属して社会問題に取り組むことについても話していたきたいと事前をお願いしていたことから、講演の前半は「自己紹介」と題して、ご自身の3.11の被災の経験と、NPO法人に勤務するに至った経緯について紹介があった。当時東京で勤務をしていた松久保さん自身、「東京は大丈夫だろう」と考えていたという。しかしその後、遅れていた工事に起因する偶然の結果、4号機の核燃料プールが水に満たされていたために東京を含む広域が壊滅的な被害を受けることがなかったことを知り、「果たして受け入れ可能なリスクなのか」という疑問をもつに至った経験が語られた。

そのうえで講演の後半は「なぜ脱原発か?」と題して、「大きすぎるリスク」「高すぎるコスト」「かかりすぎる時間」「核兵器廃絶の阻害」という4つの観点から、解説が行われた。

### 講演内容への受講学生の感想

講演についての学生の感想の一部を紹介すると、最も多かったコメントは、原発のリスクとコストに関するものであった。

- ・実際に起こった原発事故よりも大きな被害が想定されていたということが印象的だった。福島第一原発の4号プールは、シュラウドの取り換え工事の遅れで、震災発生当時も原子炉ウエルに水を張ったままにしていたため、

不幸中の幸いにも助かったという事実を初めて知った。もしも4号プールからも放射線量が放出されていたら、東京方面にも避難指示が出るほどの大規模な災害になる可能性があったという見解に驚いた。このことから、原発再稼働について議論をする際には、国益や経済面だけでなく、起こりうる様々なリスクにも十分考慮していかなければならないと感じた。

- ・「確率論的リスク評価」が最も印象的に残った。国内や世界での事故発生頻度がIAEAの規定する目標より大幅に超過しているとは知らなかった。原発回帰のリスクを新たな視点で捉えるきっかけとなり、驚きを感じた。また、今回の公開授業では原発稼働の際に様々な問題が生じることを非常に多様な視点をもとにして学んだ。自ら情報収集をして何が問題であるのかを考えていかなければいけないと考えた。
- ・今回の授業で最も印象的であった点は、28枚目のスライドで知った、「PAC-3 配備基地から射程距離の35km圏内にある原発は存在しない」という情報である。「射程圏内に入っていない原発もある」なら百歩譲ってまだわかるが、「射程圏内にある原発は存在しない」はさすがに防衛できるわけがないと思う。
- ・原発について、私は今までリスクが大きいという理由だけで脱原発化がすすめられているのだろうと思っていたが、原発にはリスクだけでなくコストやかかりすぎる時間、核兵器廃絶の阻害などの危険があるということを知ったため、その点が最も印象に残った。特にコストについては、今まで国からも「原発の発電コストが一番安い」などと言われていたため、原発にコストがかかるということがとても意外だった。

また、「かかりすぎる時間」や「核兵器廃絶の阻害」に関して、以下のようなコメントが

あった。

- ・私は、原発がCO<sub>2</sub>排出量の削減にあまり貢献しないという点に驚いた。即効性のある対応が求められる中で、運転開始まで時間のある原発が気候危機対策の視点からも効率的ではないことを資料のグラフからわかりやすく見ることが出来た。
- ・日本が核爆発装置約5600発分のプルトニウムを保有しているというのが衝撃だった。日本は、非核三原則を主張しているため核兵器になりうるものは持っていないと思っていたが、すぐにでも核兵器に変えることができるものを4500発分保有しているというのは憲法第9条に違憲しないのかと感じた。

さらに、大きな被害を伴う社会的な問題に向き合い続ける仕事の困難さについても、以下のようなコメントが寄せられた。

- ・講義の内容とは少しずれてしまうのですが、最後の質問を募集した際に、福島県から被災した方が質問をなさっていた。その被災者は質問をしながらも、当時を思い出してしまい、話しているだけで辛くなっていることが伝わった。その中で、松久保さんに作業にあたるなかで、気がめいってしまったり、辛くなったりしないのかという質問に対して、辛くなってしまうと答えていた。しかし、放射線の危険性を今後の環境に広げてしまわないように対策などを考えているということが伝わり、貴重な話になった。

### 「原発活用」論を検証する力を身につける

学生たちのコメントにもあるように、本フォーラムは、「原発活用」論を市民一人ひとりが検証する力を身につけること、さらに職業として社会的課題に関わる当事者の話を聞くことを通して、社会問題の解決のために市民が果たす役割についても、考える機会が提供することができたとと言えるだろう。

## 2023年度 宇都宮大学 多文化公共圏フォーラム 第10回



主催：宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター  
福島原発震災に関する研究フォーラム

基盤教育科目「3.11と学問の不確かさ」公開授業

# なぜ脱原発する必要があるのか

福島での原発事故被害が続いている一方で、日本政府は気候変動対策と脱炭素を理由として、次世代型原発の開発と建て替えの推進、既存原発の60年超の運転を認める方針を掲げ、国会で関連法が成立しました。この方針を議論してきた経済産業省の有識者会合「原子力小委員会」に委員として参加した松久保肇さんは、NPO法人の事務局長として脱原発に向けた提言を続けておられます。この授業では、なぜ脱原発が必要だと考えるのか、またNPO法人に所属して社会問題に取り組むとはどのような意味があるのかについて、お話しいただきます。

**日時：2023年7月26日（水曜日） 16：00-17：30**

**講師：松久保 肇（まつくぼ はじめ）さん**

**認定NPO法人 原子力資料情報室事務局長**

プロフィール：法政大学院公政策研究科修士課程修了。2012年より原子力資料情報室スタッフ。共著に「検証 福島第一原発事故」（七つ森書館）、「原発災害・避難年表」（すいれん舎）など。経産省の有識者会合「原子力小委員会」や、「革新炉ワーキンググループ」の委員も務める。

**開催方法：Zoomを使ってオンラインで行います（参加費無料・15時50分から入室可能）**

参加方法：履修生以外で聴講を希望される方は、7月24日月曜日までに下記のGoogleフォームに必要事項を入力してください。参加するために必要な情報をお知らせします。申込先：<https://forms.gle/Er6ftGxXxNnW6nKz7>

問い合わせ先：[uuforumsymposium@gmail.com](mailto:uuforumsymposium@gmail.com) 国際学部 清水研究室宛て